

学校の昼休み。

明るく優しい性格のあさひには友達も多かった。

あさひを囲ってできた輪でわいわいと友人たちが思い思いの会話で盛り上がる。

そんな様子を見つめるのは望月優だ。

クラスでの評価は、悪い子ではないんだけどなに考えてるかわからない。

「あ、優ちゃ〜ん」

視線に気づいたのかあさひが優の方ににこやかに寄って顔を見た。

傍目には本当に感情が見えない。

「優ちゃん、寝不足？」

「ん.....」

「あさひちゃんすご。望月さんの表情わかるんだ」

「なんとなくだけどねー」

優のどうみても無表情にしか見えない表情にもわずかに変化がある。

あさひはそれが読み取れた。

それが嬉しくて微妙に微笑んでしまった（他の人には読み取れないが）のがこそばゆくて優は少し俯いた。

「優ちゃん.....？　っ！」

「あさひちゃん？」

友達が急に止まったあさひに声をかけようとしたとき。

「ごめん、用事思い出した！」

そういつて、あさひは教室を飛び出した。

あさひが学校を飛び出し空を見上げると、雲も光も存在しない暗黒の空が広がっていた。

。そして、この空の下に現れる異形“ライフマテリア”たちの気配もあさひにはわかった。

。だからあさひは唱える。装光妖精ソルライトに変身するワードを。

「装光！」

あさひがそのワードを唱えると彼女が来ていたセーラー服はオレンジ色の粒子となって彼女を包んだ。

さらに粒子はその形を変えていく。

まず白いショーツが乙女のデルタラインを隠し、へそ上から首筋、肩までを黒いインナースーツが包む。

セーラー服はその形を取り戻しつつも各所のオレンジ色に光輝くラインを走らせる。

両の手先には黒いグローブ、その上に装着される金属質な銀のガントレット。

両の足には黒いハイソックスの上からガントレットと同じカラー・素材のブーツがはめられる。

明るい茶色だった髪はオレンジ色へと変化し、黒目も赤くなった。

胸の前で赤いクリスタルがコスチュームのラインの終着点へと位置し、赤いスカーフを通した。

そして日之宮あさひ、いや装光妖精ソルライトはクリスタルに通されたスカーフをぎゅっと引き締めた。

「装光妖精ソルライト、見参！」

装光妖精ソルライトへの変身を終え名乗りをあげたあさひは地を蹴って跳躍し、ライフマテリアの気配に向かった。

「お、ソルだ～」

木々生い茂る公園広場。ひらひらと軽い口調で手を振るのはライフマテリアの黒い少女、シャドウだ。

「シャドウ！」

ソルライトは警戒しつつもあたりを見回す。人影はいないようだ。  
それどころか、尖兵たる人形兵も見当たらない。

「1 人なら、あなたをやっつけて……っ！」

一気に片を付けようとした時、ひゅっ、と風切り音がした。その音と肌感覚を頼りにソルライトは地面を蹴って横に跳んだ。

後ろから迫っていた音の正体が地面に当たった。  
べちゃっと音を立てたそれは粘着質でねばねばしていた。

「糸！？」

「お、せいかーい」

そして、昆虫が吐き出す糸のようなものが発射された方向を振り返ると、糸から連想されるイメージ通りの形がそこにはあった。

蜘蛛の形をした異形。

しかしサイズは通常の蜘蛛の比ではない。人間の男性のサイズより一回り大きい八脚の化け物がそこにはいた。

「なっ！？」

さすがのソルライトも現れたライフマテリアの悍ましい姿に身を引いてしまう。

それでも正義の心に勇気を灯し怯えそうになる自分に蓋をした。

そこにシャドウがまた軽い口調で声をかけた。

「新しいライフマテリアのスパイダーくんです。人形兵じゃキミの相手にならないからさ。ちょーっと頑張って強いのは造っちゃった！」

人形兵はシャドウが呼び出していた。ならばこの新たな、スパイダーと呼ばれたライフマテリアもシャドウが呼び出しても不思議ではない。

ソルライトにとって問題は、どう戦うかだった。

まず、糸の攻撃には気を付けなければならない。あれに捉えられてしまえばたちまち身体  
の自由は奪われ不利になってしまいそうだ。

あとは。

「やりながら考える！」

悩んでいても仕方ない。敵の手札全てが見えない以上は戦いながら把握していくしか  
なかった。

「やっ！」

二対の牙を持つ顎。その間には口もある。おそらくそれが糸を出すのだろう。

顎の動きに注視しながらソルライトはスパイダーとの距離を詰めていく。

「ぎいっ！」

ソルライトの予想通り牙の間から発射される粘着糸。

顎の直線状、つまり射線からずれていたソルライトにはあたらず、べちゃべちゃとおぞ  
気の走る音を立てて地面に張り付いていく。

やがてスパイダーとの距離は短くなり、ソルライトの蹴りの間合いが訪れた。

「今っ！」

オレンジの光をまとった足がスパイダーに向かって放たれる。

ソルライトの纏った光が宙を裂いた。

スパイダーのいない、宙を。

「えっ？」

ソルライトは完璧なタイミングで放った蹴りの空振りに困惑した。

しかしすぐにその理由がわかった。

スパイダーが尻から出していた粘着糸をソルライトの死角になる木にはりつけ、それに  
引っ張られて後退したのだ。

スパイダーはものすごい勢いで自身がしかけた糸に引っ張られて木に着地する。

そして続けざまにソルライトの方へ粘着糸を伸ばした。今度は顎からだ。

「きゃあああ！！」

蹴りの姿勢から態勢を戻すのに時間がかかったソルライトは糸を躲すことができな  
った。

純白のセーラー服の布地に、汚らしい白が付着する。

—まずい引っ張られる。

ソルライトはそう思って後ろに踏ん張るよう力を入れたがスパイダーの取った行動は逆  
だった。

蜘蛛型の異形は粘着糸の力を利用して、ソルライトの方へと突進したのだ。

「がはっ！！」

ソルライトの小さなお腹に、人間よりも大きな蜘蛛の体重が勢いをつけて叩きつけられる。

その衝撃はソルライトが常人離れした力を持つ装光妖精でなければ確実に即死していたほどだ。

装光妖精の力でも、死にまでは至らないがダメージは深刻だ。

やがて宙に投げ出されたソルライトの華奢な身体は地面に激突し、また痛みの衝撃を.....受けなかった。

その代わりにソルライトを襲った感覚はねばねばとした不快感。

それが先ほどスパイダーが外した攻撃だと気づくまでに時間がかからなかった。

また、この糸は仰向けになっているソルライトからは見えないが、しっかりとした蜘蛛の巣模様の形をしていた。

蜘蛛の巣に捉えられたソルライトとその上に乗るスパイダー。

その様子はまるで罠にかかった蝶々を蜘蛛が襲っているようだった。

「うくっ、脱出しないと.....」

この危機的状況から脱出するためまずはこの蜘蛛の糸をひきちぎりたい。

しかし、ソルライトが前へ腕を出して引きちぎろうとしても、蜘蛛糸の後ろに引っ張る力と粘着力が強く、押し戻されてしまう。

足も同様だった。

もがくほど絡みつく糸に焦りを募らせるソルライトにさらなる悲劇が襲う。

「おっぐう!？」

腹部を穿つような重たい一撃。

スパイダーが足の一本を使って、無防備なソルライトのお腹を踏みつけたのだ。

胃が圧迫されて、胃液がこみあげそうな感覚。それほどまでの衝撃。

しかもこれは1回目だ。

「がはっ! あぐう!!」

怪物の蜘蛛足というハンマーの連打。

2回、3回とスパイダーは加虐を続ける。その度ソルライトの口から唾液とともに空気と悲鳴が漏れた。

暴虐を受ける身体は痛みで鉛のように重くなっていく。

「はっ、はぁ.....」

続けられる暴虐にソルライトの肩が上下し、額からは珠汗が流れる。

正義の妖精は蜘蛛のいたぶりでかなりの体力を奪われてしまっていた。

「うぁ.....? なんか変.....」

唐突に、身体が熱くなった。それは攻撃を受けての体力の消耗というだけではない。別の要因もある。

ソルライトは知る由もないがスパイダーの糸には女の性感を刺激する催淫効果があったのだ。

直接性的な場所に触れられていないとはいえ、じわりじわりとその毒がソルライトを蝕んでいた。

さらにスパイダーは新たな毒を追加することにした。

その注入先はソルライトの首筋。

ギラリと光る顎についた牙をゆっくりとソルライトの首筋に近づけていく。

「くうっ……！」

ソルライトは襲い来る痛みに耐えるため、歯を食いしばる。

そしてスパイダーの牙がずぶりとソルライトの首筋に突き刺さった。

「あざいいいい！！」

我慢の覚悟さえ容易く貫く牙。

鋭い痛みを与えられ、ソルライトは甲高い悲鳴を公園内に響かせた。

ただ思いのほかその時間は短く、すぐにスパイダーは牙を引き抜く。

「あぐっ！」

引き抜かれた時に反射的に悲鳴はあげるものの、牙がもたらした点の痛みはすぐに引いていく。

その代わりに現れたのがうすら寒さと生暖かい熱という相反する感覚だった。

「な、なに……？ これ」

幼いソルライトがそれを性感刺激だと理解するには知識が足りなかった。

しかし経験の方はすぐに教え込まれることとなる。

「ふあ……あ……」

じんじんと下半身の一部分が疼く。

ソルライトはその急な変化に困惑を覚えた。

「変だよ……おまた、なんかあついい……」

ことの仕組みを理解できていない主人を差し置いて、ソルライトの下半身の小さな割れ目はじわりと愛液を分泌していた。

プリーツスカートで隠れているのをいいことに恥汁は白いショーツに小さなシミを作った。

装光妖精のコスチュームの裏に隠れた雌のにおいに興奮したのか、スパイダーは脚を刃に見立ててソルライトに振りかざす。

「うあああ！？」

蜘蛛足のひっかきを受けて、ソルライトのセーラーコスチュームの一部が激しく火花をあげて切り裂かれる。

闘いのために生成されたコスチュームではあるが絶対の無敵というわけではない。

激しい外部からの攻撃を受ければ、破損もする。

証拠に、セーラー服部分の白地の隙間からはインナースーツの黒が、プリーツスカートの隙間からはしみで汚れた白のショーツが見えた。

外部を多少破損させるだけでは、まだ蜘蛛の刃はとどまらない。

先の踏みつけと同じように、何度も何度も蜘蛛足は正義の妖精の身体を、コスチュームを引き裂いた。

「ひぎやあああ！！」

線の痛みとともに正義のコスチュームが破壊され、徐々に素肌、特に乳首や秘所などの牝の部分が露わになっていく。

そしてそれこそが、スパイダーという怪物の目的だった。

気づけば愛らしい2つの乳首はぷっくりと立ってその存在を主張している。

少量だった愛液も今では足の付け根まで届いて今にも地面に垂れ落ちそうなほどだ。

ソルライトの息が上がり、眉が八の字に曲がった弱弱しい表情は、物理と性、両方からの責めに由来していた。

額にとどまっていた汗も気づけばじっとりと全身から噴き出している。

地面に張られた蜘蛛の巣が、手足を絡めとり弱った妖精が脱出することを許さない。

スパイダーはおまちなかだ、とばかりに牙と牙をこすりあわせた。

その間から、糸ではないものが現れる。

それを見て、ソルライトはひっ、と小さく喉を鳴らした。

二つの凶器の間から出たのは指2本分の幅がある、長い触手。ねっとりとした液体を滴らせるそれは、まさしく性の凶器だった。

「それで、なにをするの……？」

本能的に危険を感じ取るものの、知識のないソルライトはそれがなにを目的にするかまでは理解できない。

スパイダーは、これはこうするのだと無知な妖精に教え込むかのように股間の割れ目にぬるぬるとした液体まみれの触手をあてがった。

そこまでくれば、知識などなくても身体で、そして心で理解できた。だから叫ぶ。必死に叫ぶ。

「だめっ、やめてっ、おねがっ！ かつはあ！」

大事なものが、大事な一線が壊される。心で理解したソルライトの懇願は、拒否することを拒否したスパイダーの触手によってあっさりと打ち砕かれた。

狭い割れ目を強引にこじあげ、指2本分ある触手が女の子の膣奥に入りこむ。

「やだあああ！！ 抜いて、抜いてええ！！」

気持ちの悪い触手が自分の大事なところに入っている。その事実は受け入れがたく、ソルライトはぼろぼろと涙をこぼして叫んだ。

泣きじゃくる姿は年相応のものだが、それは悪と戦う戦士のものではなかった。

それは正義と悪の戦いの場において、悪の優勢を象徴づける。

さらにここは精神的な意味合い以外にもこう使うのだ、と言わんばかりに悪の触手が膣内を探った。

「はう.....はっふ、ひあう！」

心は絶望の最中というのに身体は熱を帯び、甘く湿った吐息が漏れる。心が強く拒んでも、ソルライトの女の性は快楽を噛みしめてしまっている。

ただ、これは本番ではなかった。触手はソルライトの性感、その急所を探っているのだ。

。獲物により甘く、より激しい快楽を与えるために。

今与えられている快感など、そのための準備運動のようなものだ。

そして触手は急所に探りをつけた。そこからはすぐだった。

触手がぱくりと性感帯をつつくと、衝撃がソルライトの股間から脳天までを叩いた。

「はひゃああああ！！　なにこれえええ！！」

人生で今まで一度も受けたことのない衝撃。

それが痛みではなく快楽をもたらした幼い身体と心を焼く。

普通の女性の人生ならば味わうことはなかったであろうオーガズム。

こんな激しすぎるものを理解することも耐えることもできるはずがなかった。

「しらにゃい、わたひこんなのしらにゃいいい！！」

蜘蛛糸に絡まれてまともに動かせない体の代わりにぶんぶんとソルライトは何回も首を横に振った。

ごん、ごん、と触手が膣内で前後しGスポットに頭突きを繰り返す。

そのたびにソルライトの芯に電撃が走り、全身がガクガクと痙攣し暴れようとするが、その度蜘蛛糸が身体を引き戻す。

ソルライトはもはや舌をしまうことすら忘れて大粒の涙やとめどない涎を垂れ流し、自身のコスチュームを汚していった。

そのコスチュームも汗で肌にべっとりとはりつき、胸の上下運動につられて動いている。

。繰り返される触手のノックが極限までソルライトの性感を刺激していく。突く度に強く、突く度にさらに激しく。そして。

「ふえ？　にゃんか、にゃんかくりゅ、はう、ふっあああああ！？」

なにか得体のしれないものが胸に、股間に、体全身に昇りつめてくる感覚。

そしてそれらが解放される感覚。

ソルライトはその感覚の解放、人生初めての絶頂をキメた。

ぶし、ぶしゃあと音を立てて盛大に妖精のイキ潮が地面にぶちまけられる。

「あっ.....あうう.....えっ！？　はっひい！？」

ソルライトが絶頂の脱力感の余韻に浸ろうとした時、休むなと言わんばかりに膣内の触手が暴れた。

休もうなどと甘えたおしおきだと言わんばかりに、乱暴に女の子の中を叩く触手。その衝撃のどれもが、はじけるように幼い妖精の性感を刺激した。

「えっ！？　なんで、なんでえ！？　さっきの、また、くる、またくりゅっ！　あひゃあ  
ああ！！」

再び登ってきたというよりは戻ってきたという感覚。そしてまたその解放。  
ソルライトはあっさり2回目の絶頂を迎えた。1回で終わりなどと甘えるなど、触手  
から身体に教え込まれているかのようだ。

「おっぐ！？　な、なに、いままでと、違っ、かつはあ！？」

ソルライトの股間から腹部にかけての感覚が、変化した。  
今度は触手が叩く扉を変えたのだ。  
今までは膣内でも手前の部分を責めていた。  
しかし今度はよりもっと奥の奥の深い部分。子宮口だ。  
どっ、どっ、と激しいストロークをもって刺激される子宮口はソルライトにさらに激し  
い衝撃を与える。  
大事な入り口が激しく叩かれるたび、衝撃を受けた脳が見せる視界が、ちかちかと激し  
い白に包まれて思考の余地を奪う。  
そんな激しい衝撃が繰り返される中で、ドンッ、とひときわ強い一撃が、子宮の扉を叩  
いた。  
それはソルライトの性感を決壊させるには十分な一撃だった。

「はっひゃああああああん！！」

あまりにも重すぎる触手の一撃に、ビクビクビクと全身が跳ねた。  
暴力のもたらす虚脱感と快楽のもたらす多幸感の二重奏を受けて、ソルライトの身体に  
力が入らず脱力する。その弛緩は下腹部にも伝わった。  
緩む膀胱。じょろろろろろろ。  
絶頂妖精のお漏らし汁が勢いよくアーチを描いて地面に落ちる。  
ぷるぷると震える二の腕が、ガクガクと揺れる太ももが、なにより舌を外気に晒してイ  
キ顔を晒す顔が、ソルライトの身体が快楽に屈服してしまったことを示していた。  
そう、身体はだ。  
正義の妖精の奥底の心はまだ屈してはいない。

「あ、ああああああああああ！！」

雄たけびは、蹂躪を受けたからではない。ソルライトの身体からオレンジの光が炎のよ  
うに輝き、拘束した蜘蛛糸を焼き尽くす。  
そして、スパイダーにのしかかられている状態のソルライトはそのまま地面すれすれに  
ひじを引き、光のエネルギーを凝縮した拳を“上”に向けて突き出した。

「ソル・ブレイバー！」

ソルライトの必殺の拳が、スパイダーを捉える。  
巨大蜘蛛は暗闇の空に向かって大きく跳ねあがり、爆発した。

「う.....ううう.....」



闘いには勝った。シャドウももういないようだ。  
しかし心への爪跡は大きく、ソルライトはしばらくうずくまって泣いた。